新潟県小中学校教頭会
会報
No. 185

目　次

●副会長あいさつ …… 1
●県教頭会研究大会の報告 …… 2～3
●専門部活動報告 …… 4
●新入会員の声 …… 5
●郡市教頭会ネットワーク …… 6～7
●特集 …… 8
●随想 …… 9
●教育懇談会報告 …… 10

# 夢を語り合える、教頭会

新潟県小中学校教頭会
副会長　**牧　野　　剛**
（新潟市立東新潟中学校）

平成30年がスタートしました。今年は「土の兄（つちのえ）の戌（いぬ）年」になります。戌年の「戌」の字は、「滅（めつ）」が由来との話があります。そこから、『草木が枯れる』と言う意味があるのだそうです。何か、縁起が悪い感じがしますが、実は草木が枯れて休眠する年、つまり、季節の変化を受け入れ休眠し、次の亥年に命の種と力を委ねる（新しい命を育む縁起の良い）年なのだそうです。まもなく終わろうとしている、平成の元号にも深く関わっているような気がしています。

さて、年度当初に西條県教頭会長は、「先を見通し、新たなステージへ前進する教頭会」と題して今年度は、新しい学習指導要領について、全学校、全職員に周知徹底する年度と位置付けられました。現中学校３年生が大きく変わろうとする社会の変化の最先端にあります。彼らの今後の成長を指針として、子どもたちが、これからの社会に対応する資質・能力をどう身に付けていけば良いのかを学校全体で明確にできるよう私自身努力して参ります。同時に、我々教員自身もどう変わっていけば良いのかを考えなければなりません。働き方改革を筆頭に従来通りではなく、各校の校長先生のご指導をいただきながら「変えることの大切さ」を所属の教職員と共有していきましょう。

第53回新潟県小中学校教頭会研究大会～上越・妙高大会～を昨年10月27日に無事終了することができました。ひとえに各教頭会会員の皆様の日々の実践と学校運営に誠心誠意ご尽力いただいているおかげであると、心から感謝申し上げます。研究大会を主管された上越市教頭会並びに妙高市教頭会の皆様、心のこもった大会運営を誠にありがとうございました。本研究大会で採択された大会宣言の八つの決議を来年の第11回ブロック別研究大会、そして平成31年度関ブロ研究大会新潟大会に生かして参ります。

上越・妙高大会で講演していただいた、武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授、人間性脳科学研究所所長の澤口俊之様の講演内容で心に残ったことは、『何年・何十年先の目標をもてるのは人間だけであると同時に、夢をもたなければ成功はしない』と言う言葉です。昨年の12月７日に勤務校では、新潟日報社主催の「ことばの学校」が開催されました。その中で、講師を務められた、フリーアナウンサーの伊勢みずほ様も、『夢』について語ってくださいました。「『夢』は人に語ることが大切。人に語ることで、自分の夢を叶えるための情報が自然と集まってきて、少しずつ実現へと近づく。」というものでした。どんなに社会が変化しようとも、その中で子どもたちが自分自身の夢をもち、互いの夢を語り合う姿を見ることが、私たち教師の『夢』であるように実感することができた瞬間でした。

終わりになりますが、次年度の第11回ブロック別研究大会は平成30年11月２日(金)、平成31年度関ブロ研究大会新潟大会は11月７日(木)・８日(金)に実施されます。全会員で『夢』を語り合える会にしていきましょう。

# 県教頭会研究大会の報告

## 県教頭会研究大会 上越・妙高大会を終えて

研究大会実行副委員長
五十嵐　　悟
（妙高市立新井小学校）

３年に１度の県内小中学校の教頭が一堂に会する研究大会が、平成29年10月27日に上越文化会館等を会場に開催されました。650名を超える会員が集い、研究主題に基づき、14の分科会でグループによる協議を行いました。以下、成果と課題について報告いたします。

〔成果〕

1　地域に開かれた教育課程の実現のために、学校と地域が目標を共有し、組織的に動く体制づくりが大切であり、それが地域の活性化にもつながるということを確認できた。

2　教職員から信頼を得られるよう、一人一人の先生方、子どもたちを確実に見ること、地域との連携を確実に行うことについて共通理解できた。

3　「地域と学校の目標・ビジョンの共有」を図るために、組織づくり、人選が重要な役割をもつこと、そしてＣＳ委員・教職員の意識の向上を図るために教頭が中核となって働き掛け、会議のもち方等を工夫することが大切であることを知ることができた。

4　特に、小規模校では学校間連携した取組が社会性の育成に有効である。人間関係が広がることにより児童生徒が自校の活動だけでは感じなかった新たな課題を意識するなど、社会性のさらなる向上への可能性が広がった。

5　「教員は学校現場で育つ」という視点から、日々の教育活動を通じて必要な能力を高めていけるＯＪＴを機能させることが重要であることを確認できた。

6　ＣＳ制度は、地域とともに歩む学校づくりに大変有効であることを共有、確認できた。今後、導入を検討している市町村は、先進地域、先進校の取組を参考にしていく。

7　教頭として、関わることを焦点付け、それを最後までやり切ることが大切であるということを確認することができた。

8　ポイントを絞る、実践を大切にする、外部機関との連携を図るなど、教員の資質・能力の向上を目指す研修の在り方と教頭の関わり方について確認できた。

〔課題〕

1　多くの地域の人材を教育課程に位置付けると、守秘義務の問題、話の内容や話し方の難易度等、人に関わる課題がある。

2　教職員の充実感の獲得や多忙感の解消にバランスよく取り組む必要がある。多くの課題を分析整理することで、それらの課題の本質を見極め、各々の課題を関係付けながら取り組んでいくことが大切である。

3　子どもの教育的ニーズは多種多様である。それに対して教頭会としてどのように関与し、どう自校化していくかが今後さらに重要になる。

4　学校や学区単位の職員が共通の認識をもってキャリア教育の推進に取り組む必要がある。職員の意識改革無しには、多忙化の解消に結び付かない。

5　財務に関するマネジメントサイクルにおいて、財務委員会を通して適切な評価と改善を図っていかなくてはならない。

6　中学校区などの教員組織は、つくられていても形式的になっている場合も多い。教頭としてどう関わり、実質的、効果的な組織にしていくのか明らかにしていく。

7　教頭が校内のコーディネーターとなり、学校全体として若手教員の資質・能力の向上を図っていく必要がある。ベテラン職員を若手教員育成のために、どう生かしていくかが課題である。

8　教職員の専門性を向上させるための場・環境が必要である。環境整備のためには、資金や外部からの支援も必要である。それらとどうつながるか、つながりをどのように組織していくかが問題である。

収容人数の関係で分科会は別の複数の会場に移動していただくなど不便をおかけしましたが、どの会場も自校の現状と課題をもとに熱心な意見交換がなされ、大変充実したものとなりました。ご後援、ご指導いただきました関係諸機関及び指導者の皆様、県教頭会の皆様に感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

# 県教頭会研究大会参加報告

## 県教頭会研究会 上越・妙高大会に参加して

燕市西蒲原郡小中学校教頭会
小　山　政　之
（燕市立吉田北小学校）

秋深まる10月27日、美しい山並みを見ながら上越市に向かいました。

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」を研究主題とした今回の全県教頭会は、私にとって大きく２つのことを学ぶ機会となりました。

午前は、上越文化会館で記念講演が行われ、テレビでも活躍中の人間性脳科学研究所所長の澤口俊之様からご講演をいただきました。「指導者が伸ばすべき能力」を演題とした講演の中では「人間らしい人生を送るための脳力＝HQ」を伸ばしていくことが大切であるということを説かれていました。テレビの裏情報を交え、ユーモアあふれる語り口で児童・生徒の脳力を伸ばす指導はどうあったらよいかについて有益なご示唆をいただきました。

午後は、第４課題「組織・運営に関する課題」の第９分科会に参加しました。最初に佐渡市小学校教頭会の皆様から「若手教員の資質能力の育成を目指す教頭の取組」についての提言発表を聞かせていただきました。これからの大量退職と大量採用の時代を見据えた若手教員の育成は、教育現場にとって急務です。提案発表の内容は、大いに参考になるものでした。その後の小グループに分かれての情報交換会では、若手教員を育てる場と時間をどのように設定していくか、教頭の関わりはどうあったらよいか等の課題について話し合い、悩みを共有しました。妙高市教育委員会指導主事の江口克也様からは、「若手を育てるＯＪＴが効果的なＰＤＣＡサイクルとして機能しているかどうかの確認が必要である」ことや「教頭の出るところと引くところをよく考えておくことが大切である」ことをご指導いただきました。自校の取組において肝に銘じておくべきことを学びました。

最後に我々会員に学びの場を提供し、大会を運営してくださった実行委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 教職員の専門性の向上に関わる教頭の役割 ―県教頭会に参加して―

新潟市小学校教頭会
戸　田　道　治
（新潟市立鳥屋野小学校）

県教頭会研究大会上越・妙高大会では、教職員の専門性の向上を課題とする第11分科会に参加しました。発表は、新潟市立浜浦小学校教頭の新田見誠先生です。中学校区の小中連携と校内研究の２本柱で、教頭としてどのように関わり教職員の専門性を向上させているかという内容でした。

発表後は、グループごとに、中学校区の現状や教職員の実態に合わせて、教頭としてどのように対応しているのかを話し合いました。

どの先生も、教頭として、次の２つを意識して教職員の専門性向上に当たっていました。

**１　リーダーシップの発揮**

新田見先生の発表では、「中学校区５校の教頭が集まり、連携する方向付けを行う」とありました。

グループ協議の中でも、教頭が課題を見付ける重要性が出されました。中学校区の課題に限らず、校内の課題も、校長の指導や教育ビジョンに鑑みてリーダーシップを発揮している事例が出されました。同時に、ミドルリーダーを中心に進めさせることで教職員のやりがいを生む配慮も出されました。

**２　教職員一人一人と結び付きながらの底上げ**

浜浦小学校では、一人年間３回授業研究をするそうです。新田見先生は、その全ての指導案作成に関わり、赤ペンを入れて指導するとのことでした。

日々の業務の中で、教頭が全指導案に赤ペンを入れることは難しいことです。そこで、日常的に教室に入って会話を交わしている事例が多く出されました。頻繁に教職員と食事に行くという例もありました。全て、教職員一人一人とつながる人間関係を大切にしていることが分かりました。

最後は、上越教育委員会管理指導主事の笹川隆様より、ご指導をいただきました。教頭のリーダーシップは、常に先を見据えて、かつ校長の意を体して行うことの大切さをお話しいただきました。

# 専門部活動報告

## 調査要請部の活動報告

調査要請部長
坂内　徹
（新潟市立笠木小学校）

調査要請部では、今年度も次の２つの調査事業を柱に活動を展開しました。ご協力に感謝します。

1　勤務実態調査（本県独自）及び全国公立学校教頭会基本調査実施と報告書作成
2　「平成30年度新潟県義務教育の振興に関する要望書」の基礎資料作成のための調査実施と意見報告書作成

詳細は、年度末発行の報告書をご覧ください。

一端を紹介しますと、朝７時以前に出勤している会員の割合が45.2%と昨年比１%減、夜20時30分以降に退勤する割合は25.8%と昨年比7.4%減となっています。

平日の勤務時間が13時間以上の会員が、昨年は53.1%でしたが今年度は39.9%と減っています。しかし、身体的疲労・精神的疲労を感じている会員も依然として多く、それぞれ66.1%、59.9%もいます。さらに、教頭の職務の中で「魅力ややりがいを感じること」として、「児童生徒の成長が見られた」、「保護者・地域から感謝や良い評価の言葉が寄せられた」としているのに対し、実際に時間や労力を費やし負担に感じている職務は、「保護者・ＰＴＡとの連携」となっています。負担に感じる職務は、「苦情への対応」「依頼文書処理・各種調査依頼への対応」が４割以上を占めます。

このような実態から、教頭の職務改善はまだまだ進んでいないと言わざるを得ません。全公教と連携し、厳しい勤務実態を関係機関に訴えていきます。

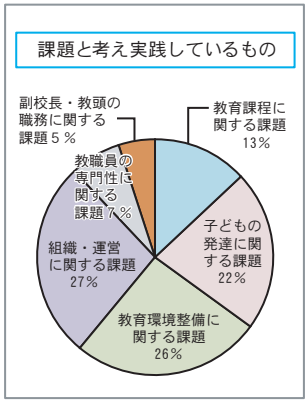
次に要望書への調査です。要望数が多い順に「次期学習指導要領の実施を見据えた学習指導の改善及び生徒指導の充実に向けた人的配置の拡充」(591人)、「きめ細かな指導の実現に向けた、６学級規模小学校への級外教員配置及び中学校学級担任複数配置の拡充」(450人)、「特別支援教育の将来展望を見据えた教員の採用・人事配置及び人材育成のための制度の拡充」(432人）となりました。今後も校長会と連携し要請活動を展開していきます。

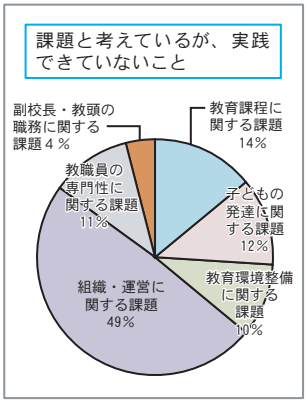
## 教育課題部の活動報告

教育課題部長
星　徹
（長岡市立東中学校）

10月27日(金)に、第53回新潟県小中学校教頭会研究大会が上越市を会場に開催されました。教育課題部では、本研究大会の「サブテーマ追究の窓口と実践の視点」を踏まえ、会員が「自身の実践」を省みる機会とし、また、「仲間の受け止めや実践」を知る機会としてアンケート調査を実施しました。校務ご多用の中、皆様からアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

第４課題「組織・運営に関する課題」を選択した割合が27%と全課題の中で最も高く、その中の「多忙化解消に向けた業務の適正化」に対する意識が高いことが指摘されています。一方で同時に「組織・運営に関する…」について課題として実践できていないという指摘（49%）もあげられています。




それらの課題追究のための窓口について、各課題の分析の中で、教頭が直面している具体的課題が見えています。

集約・考察の詳細は、県教頭会ホームページや「調査報告書」(年度末発行）をご覧ください。そこには、各校における具体的な実践と改善のヒントが多く記載されています。これからの取組に役立てていただけるものがきっとあると思います。

近隣校、郡市教頭会レベルからの教頭ネットワークにより、各中学校区等を基盤とした課題解決を試みていくことで、各校の教育活動の充実・拡充を期待したいと思います。

## 小猿屋小学校、最後の教頭として

上越市立小猿屋小学校
工　藤　寛　之

上越インターから高速道路で新潟方面に車を走らせると、すぐ右手に見えるのが、私の勤務する小学校です。これまでずっと中学校勤務でしたので、初めての小学校勤務と教頭職に戸惑うこともありました。そんな私の心の支えは、純粋で元気な子どもたちと、厳しくも温かく受け止めてくれる職員です。管理職らしからぬ発言ですが、教頭を育てる職員集団です。

最近、様々な会での自己紹介の際「小猿屋小学校、最後の教頭です。」と言っています。今年度末で学校統合により、校舎移転になります。仲間は、開口一番「大変だね、頑張れよ。」と、私に檄を飛ばします。通常の業務に付加されるように新設校の準備が入り、私以上に職員もその準備に不安や大変さを抱えています。そんな私には「頼むね。」の言葉に対して、期待以上のプランを準備してくる職員と、「大丈夫、いいねえ。」と勇気を与え続けてくださる校長先生という、強い味方がいます。何と言っても、子どもたちの笑顔が、パワーの源です。

高速道路を挟んで左手に見える新しい校舎が、今日も私たちの期待感をあおります。

## 地域とともに歩む

糸魚川市立木浦小学校
永　森　幸　代

木浦小学校は、豊かな自然と小規模校のよさを活かし、地域の「人・こと・もの」を積極的に活用したESDやキャリア教育を教育活動の核としています。そのため、地域との連携は欠かせません。初めての地域、慣れない教頭の仕事に、戸惑ってばかりいましたが、皆様に支えられて、楽しく充実した教育活動を展開することができたと思います。

キャリア教育では、様々な方面で活躍されている地域出身の方を講師に招き、職業選択の理由や夢を描くことの大切さ、失敗から学んだことなど、講師先生の生き方に触れることができ、子どもたちとともに私自身も自分を見つめ直す機会となりました。

「大きな夢も一日の一歩から」講師先生からいただいた言葉です。気ぜわしく過ぎていく毎日ですが、どの一日も夢へと続く大切な一歩と捉え、地域とともに子どもたちを育てていきたいと思います。

## 地域とともに歩む学校

十日町市立中里中学校
宮　﨑　次　朗

見知らぬ町、新しい職場、新たなる立場。日々翻弄されながら、がむしゃらに走ってきました。最近ようやく、先を見通しながら考える余裕ができてきました。

ここ中里はすばらしいところです。国立公園にも指定されている美しい自然環境、野菜や果物などいろいろな旬のものを食べてくださいと持ってきてくださる地域の方々。お祭りやイベントを一丸となって楽しもうとする地域性。歴史書をひも解くと、著名な人材をたくさん輩出している誇り高き地域であることも分かりました。

これだ!! このすばらしい環境、優れた人材、協力的な地域性を積極的に学校に生かし、学校の応援団にしていくことが私の使命と考えました。教頭としてどう具体的に動くか、地域とのパイプをどう太くしていくか。精一杯努力していきます。

## 小学校と中学校の違い

佐渡市立高千中学校
伊　藤　　彰

これまで小学校に勤務していた私が、中学校の教頭になり、まもなく１年が過ぎようとしている。やはり小学校と中学校には違いがあり、それを踏まえて管理職としての業務を進めなくてはならない。

まず、学習指導において、小学校は担任が全教科を指導するため、教科によって指導法が大きく異なることはない。校内研修を核に、指導法を共有しながら授業改善を進めてきた。中学校は教科の専門性が高く、指導法も個性的である。

そして、生活面でも、小学校は担任が指導し、全般を把握している。中学校では限られた時間だけを在籍学級の生徒と過ごすため、問題が生じた場合は生徒指導主事とともに解決に乗り出す。

今後も、部活動指導等、各種業務の確実な理解に注力し、教職員一人一人のプライドを大切にしながら業務改善や指導力向上の取組を推進していく。

# 郡市教頭会ネットワーク

## 一人一人がネットワークの一員 ～顔が見える連携を目指して～

妙高市教頭会
副会長　寺　島　政　敬
（妙高市立新井中学校）

妙高市は、越後富士とも称される妙高山を仰ぐ、自然環境豊かなまちです。妙高市教頭会は小学校８校、中学校３校、市立総合支援学校１校の計12校で構成されています。児童生徒数の減少に伴い、ここ数年の間に３校が閉校し、学校の統廃合が進みました。小さい組織ではありますが、和気あいあいとした雰囲気の中で活動を進めています。

**１　研修**

春の総会時に第１回研修会も合わせて行っています。ここで研修の方向性や研修計画についての共通理解を図ります。今年度の研修の１つにコミュニティ・スクールについての円滑な運営、取組の向上に教頭としてどう関わっていくかが視点となりました。組織の編成、各校の取組状況、成果と課題について情報交換を行い、自校の活動に生かしました。各校の置かれた地域の実態や特色は異なりますが、こうした情報交換に始まるお互いのネットワークは重要です。また、各研究大会の参加報告を共有し、教頭としての資質向上に役立てています。

**２　他組織との連携**

他の組織との合同研修も当市教頭会の特色の１つです。事務職員との合同研修会を、今年度は税理士の方を講師に「適正な会計処理と不正事故の防止」をテーマに講演と懇親会を実施しました。また、適切な対応が求められる「児童虐待の対応」について市子育て支援課職員を講師に研修を実施しました。事例に学ぶだけでなく、市の職員との連絡・相談を円滑化する有意義な研修とすることができました。

**３　顔が見えるネットワーク**

妙高市では「生命地域妙高で　学び支えて生きるひとづくり」を基本理念に全市を挙げて取り組んでいます。学校間、市教委、関係機関や地域とのネットワークは顔が見えて、より一層強くなると考えています。１つ１つのネットワークをさらに結び付ける教頭会を目指し、日々の教育につなげていきます。

## 研修を通して高め合う教頭会

小千谷市教頭会
副会長　村　田　洋　一
（小千谷市立小千谷中学校）

**１　はじめに**

小千谷市教頭会は中学校５校、小学校８校（９名）、総合支援学校１校で組織されています。小千谷市が学校教育の指針として全市で取り組んでいる「おぢやっ子教育プラン」を踏まえて、教頭として小千谷市内の子どもたちをどう育てるか、小千谷市の教育にどう関わるかを日々研鑽しています。

**２　教頭としての研修**

定例教頭会、校長・教頭合同会議、学校事務共同実施研修会等を含めて年９回の会議や研修を行っています。

今年度の定例教頭会では今日的な課題について研修を進めました。その一つとして「危機管理」についての研修では、Jアラートが発令されたとき、学校でとるべき対応について研修しました。具体的資料を持ち寄って考えることにより、それぞれの学校での対応を見直す大切な機会となりました。「中学校区連携」についての研修では、中学校区ごとに取り組んでいることを発表し、中学校区として取り組めることは何かを考えました。その他に「第３次多忙化解消アクションプラン」「地域連携」「学習指導要領移行措置対応」「全国、関東甲信越教頭会参加から学んだこと」などをテーマとして研修を行いました。

学校事務共同実施研修では、市内事務部会と協力し「どうしたら学校文書が円滑に流れるか」や「教育委員会との連携はどうあるべきか」などについて協議しました。

また、市教育委員会管理主事兼指導主事様から「教育現場から見える学校現場」という内容で講話をしていただきました。教頭時代の経験をもとに、教頭として校長の考えを受け止めながら職員をどう動かしたかについての話がありました。また、教育委員会の立場として教頭に求める職務や教育委員会の考えについてご指導いただきました。

**３　終わりに**

教頭の業務は多岐に渡ります。日々分からないことと遭遇します。その時に最も力になるのが市教頭会でのネットワークです。15名の教頭会のネットワークを生かし、困ったらすぐ教頭メールや電話等で情報交換し、解決を図っています。また、盛大に行われる懇親会も小千谷市教頭会のネットワークを円滑にする大切な研修になっています。

# 郡市教頭会ネットワーク

## 見附市教育の充実・発展に向けて

見附市教頭会
会長　吉　田　孝　則
（見附市立見附小学校）

見附市教頭会は、小学校８校、中学校４校、特別支援学校１校の計13名で構成する組織です。全員が協力して研修に取り組み、互いの力量を高めています。また、各校のリーダーとなって、見附市の教育を推進しています。泊を伴う忘年会等、親睦の会は毎回盛大に行われ、全員の仲がとても良い温かな雰囲気の教頭会です。

勤務する見附市では、「ふるさと見附を愛する子ども」「世に役立つことを喜びとする子ども」を育てるという教育理念のもと、地域総がかりで教育を進める「共創郷育」に取り組んでいます。第53回新潟県小中学校教頭会研究大会で、見附市教頭会は、「地域学校協働活動を推進するための教頭の役割」について発表しました。見附市の全学校が指定を受け、展開しているコミュニティ・スクールの取組についての発表です。事前検討では、学校運営協議会の組織、学校と地域・保護者との目標・ビジョンの共有、地域学校協働活動の在り方等について、自校の取組をもとに、熱心な協議が行われました。

また、年に３回、見附市教育長様から教頭会の際にご指導をいただいています。10月は、「教頭の職務」と題し、「見通しをもって準備を進めること」「的確に判断を下すこと」の重要性、「市の取組」「市の教育」「国・県の動向」に関心をもつことの重要性等についてご講話をいただきました。このような研修によって、互いの力量を高めるとともに、見附市の教頭としての自覚と絆を深めています。

その他、見附市教頭会と事務職員との合同研修会を10月に行いました。市教育総務課担当者をお招きし、学校預り金の未納者対応について協議しました。市教委、教頭会、事務部が緊密な連携を図り、学校財務の改善にも取り組み、成果を上げています。

見附市教頭会は、これからも互いに協力し合い、管理職としての研鑽を重ね、各校の教育活動及び見附市教育の充実・発展に向け、努力していきます。

## 縦と横の連携強化の取組

新発田市小・中学校教頭会
副会長　伊　東　寿　明
（新発田市立紫雲寺中学校）

新発田市小・中学校教頭会は、小学校21名、中学校10名で構成されています。

年間を通して、小学校教頭会と中学校教頭会がそれぞれで活動をしており、年間２回の小・中合同研修会を行っています。１回目は５月に学校教育課長様から、２回目は２月に教育長様から講話をそれぞれいただき、新発田市の教育の方針や課題について研修を深めています。

小学校教頭会では、基本的に月に一度定例教頭会を実施しています。会場を輪番で決め、会場校校長から講話をいただき、その後研修会、情報交換を行います。今年度の研修テーマは「地域の教育力の活用を図る教育課程の工夫～教頭会として各学校の教育課程に関わるためにできること～」です。市内全体で活用できる「人材リスト」作成や、各種行事の計画案のデータベース化などを実践しています。情報交換では、日常における工夫や課題、悩みや解決策などを出し合い、自校の取組の参考にしています。

中学校教頭会では、中・高連携協議会を年間で２回実施し、新発田地区の高等学校の副校長・教頭と情報交換や授業参観を交互に行っています。それぞれの実態を理解することで、中高間での課題の克服に努めています。さらに入試等で連絡を取り合う必要があるとき、お互いを知っているからこそできる相談もあり、いろいろな意味で有意義な会となっています。また、定例の会を年に２回行っています。１回目は、中学校長会長様から学校経営についての講話をいただき、２回目は順番で実践発表や全国・ブロック教頭会の報告によって研修を進めています。

一番大切なことは、困ったときに気楽に教えてもらえる関係です。また、それぞれが使用できそうな資料や文書、データ等があれば、それぞれが会員に送るようにしています。相談相手や仲間がいることが身近に感じられ、多忙化解消や精神的負担解消につながっています。

# 特集 新しい学習指導要領が これからの子どもたちに求める資質・能力

新潟市中学校教頭会
**桑　原　通　泰**
（新潟市立鳥屋野中学校）

新潟市中学校教頭会では授業改善推進部が中心となり７月18日に「新しい学習指導要領がこれからの子どもたちに求める資質・能力」を考える研修会を行った。

当日は新潟市教育員会学校支援課課長補佐・齋藤純一指導主事先生をお招きし、ご指導をいただいた。

まずはじめに、昨年度、日本を代表する、ある企業で行われた新入社員選考の最終集団面接の課題に取り組んだ。大学卒業を控え、７回にもわたる選考試験と面接を突破し、この集団面接で採用が決まる大学生がどのような気持ちで臨んだか、推し量るすべもない。

その課題は「以心伝心を四則演算記号を使って表しなさい」というものであった。

答えのない課題に対して他者と協働して最善の解を求める。こうした課題に取り組みながら、どのような力が必要なのか。30年後、40年後の企業を支えていく人材に何を求めているのか、少人数のグループで議論しながら考えた。

そのような活動の後、それぞれのグループから発表してもらい、必要な力、求める力について共有した。様々な意見が出るなかで、それぞれの学校に振り返って考えたとき、どのような力がその学校の生徒にとって必要な資質・能力なのかにつなげていった。そしてそれを地域と共有し、社会に開かれた教育課程を組織していくカリキュラムマネジメントを実現する取組とした。

その後、約１時間にわたり、齋藤純一先生よりご指導とご講演をいただいた。直前に文科省での説明会があったということで、その内容の伝達を中心にお話しいただいた。その中で特に今回の学習指導要領改訂の基本的な考え方として「これまでの学校教育の実践や蓄積を生かし、子どもたちが未来、社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成し、その資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する。」という点があることをご指導いただいた。

そのお話を伺い、ここに示されている「未来、社会を切り拓くための資質・能力」とは何なのか。それは、「感性を豊かに働かせながら」「主体的に学び続けて、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして新たな価値を生み出していくために必要な力」なのではないだろうかと考えるに至った。

今回の研修で行った課題はまさにこの力を測るものだったのではないか。一見、難解に思える課題に対して、感性を豊かに働かせながら、主体的にあきらめずに考え続け、自分なりに試行錯誤を繰り返し、多様な考えをもつ他者とアサーティブにコミュニケーションをとりながらWin-Winの関係を築きつつ最適な解を作り上げていく。

まさにこの企業が求めた人材とはこのような力をもっている学生だったのではないだろうか。

次期学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の三つの柱として次のものがあげられている。

**〇知識・技能**
**〇思考力・判断力・表現力等**
**〇学びに向かう人間性等**

こうした資質・能力を身に付け、社会や産業の構造が変化していく中で、これからの子どもたちに求められるものは、定められた手続きを効率的にこなしていくことにとどまらない。感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのかを考え、自分なりに試行錯誤し、新たな価値を生み出していくことが求められる。生きて働く知識を含むこれからの時代に求められる資質・能力を学校教育で育成していくことが重要である。そのためにも私たち教頭が具体的な資質・能力の姿をイメージし、学校と社会の共通認識をもつことが大切であると考えている。

# 随　想

## 多忙≠多忙感？

魚沼市立須原小学校
江　口　範　文

「公的機関が成果を上げるのに必要なのは、偉大な人物ではなく、仕組みである。」これは、日産の会長カルロス・ゴーン氏の言葉である。どこの職場でも「働き方改革」、そのための「業務改善」に取り組んでいることと思う。

「多忙を解消することで、多忙感も解消されるのだろうか。」このことを疑問に思い続けてきた。私は、多忙感を個人の感情と捉えないで、その改善の仕組みづくりを継続的に行うことが大切なのではないかと考えている。

私は昨年、大学院で学ぶ機会を得た。「多忙感をもつのは、本人が意識していないことが原因になっているのではないか」ということを研究のテーマとした。また、各種調査で小規模校において、「忙しいばかりで、やりがいを感じない」を選択する割合が比較的高かったことから、大規模校と小規模校を比較することを手がかりに分析し、多忙と多忙感について考えていくことにした。調査の結果、多忙を感じることについては学校規模で大きな差があった。

大規模校では、校務や児童の活動の役割を分担して行っている。従って、細かい打合せが必要となってくる。小規模校では、ほぼ一人で行うことが多くなるため、自分の裁量で行う。自由にできる反面、どこまでという区切りをつけることができない。また、リードする職員も担任のため、周りに目を配ることが難しい。そのため、悩みや孤独感をもち、多忙を感じる傾向になるのではないかと考えられる。

「多忙」のことだけ考えると、会議や打合せを減らすことは必要だが、「多忙感」のことを考えると、年度当初だけでも会議や打合せをしっかり行って、協働力を高めていく必要があるのかもしれない。

須原小学校の学校経営方針、子ども・地域・そして職員も「笑顔あふれる学校」を目指し、教頭としてできることに取り組んでいきたいと思う。

## 汲（く）む　―Ｓ・Ｗに―

佐渡市立八幡小学校
齋　藤　千賀子

新採用の学校で出会ったのがＳ・Ｗ教諭でした。同年代で、同じ教員住宅に住んでいたこともあって親しくなりました。ある日、夕食に招待され、Ｗさんの部屋に入った時、私は本棚に目が釘付けになりました。有名な文学作品、でも、私は読んだことのない本や様々な分野の書籍が並んでいました。Ｗさんは新潟市の出身でしたが、休日には、佐渡のあちこちを巡って見聞を広めていました。生まれ育った私より佐渡のことに詳しいのです。話をしていると、自分の見識のなさを思い知らされ、自分ももっといろいろなことを学びたいと思うようになりました。Ｗさんとは、佐渡のあちこちを散策し、多くの時間を共にしました。鬼太鼓座が鼓童（こどう）として活動を始めた年の「鼓童夏の学校」に参加したことや、新潟市の小さな映画館で東京裁判の実写版の映画（約６時間）を見て語り合ったことは特に思い出深いです。出会った年、Ｗさんが私の誕生日に宛てたカードに詩がありました。茨木のり子さんの「汲む ーＹ・Ｙにー」という詩でした。その一部より、

初々しさが大切なの
人に対しても世の中に対しても
人を人とも思わなくなったとき
堕落が始まるのね 墜ちてゆくのを
隠そうとしても　隠せなくなった人を何人も見ました
(中略)
あらゆる仕事
すべてのいい仕事の核には
震える弱いアンテナが隠されている きっと・・・

Ｗさんは、背伸びをしていた私のことを分かっていたのかもしれません。この詩は私の心をリセットしてくれます。詩に込められた思い、Ｗさんがこの詩を贈ってくれた思いを汲み、おごることなく、誠実に日々の職務にあたっていきたいと思います。

# 教育懇談会報告

## 平成29年度 教育懇談会の報告

新潟県小中学校教頭会
副会長　石　野　光　一
（上越市立雄志中学校）

日時：平成30年１月23日（火）15:00～16:55
会場：じょいあす新潟会館
主催：新潟県小学校長会・新潟県中学校長会

**1　ごあいさつ**

**新潟県教育委員会教育次長　石井　　充　様**

・教員の長時間労働の解消に向けた取組の推進
・新学習指導要領の実施に向けた県教育委員会による教育支援システムの構築
・教員の部活動による多忙化解消のための新潟県版部活ガイドラインの作成

**新潟市教育委員会教育次長　髙居　和夫　様**

・平成29年度は新潟市にとって、権限委譲の元年。新潟市は財政難とも言われるが、必要なところには予算、人的パワーをしっかりとあてていく。行政は学校現場の困り感を敏感に感じ取る感性が必要と感じている。

**2　研究協議**

**協議題「地域の特色を生かし、地域とともに歩む学校づくり」**

**話題提供①**

**上越市立東本町小学校　上野　有紀　校長**

～同和教育を中核とした教育課程の編成、実践～

「一人一人の願いを生かしながら、確かな学力の向上を図る」「人権尊重の実践的態度を育む」ことを教育活動の柱とし、同和教育を実践している。

（1）職員の人権感覚を磨く校内研修（職員研修）
・４月出勤初日の同和教育校内研修
・４月の同和教育現地研修（部落解放同盟上越支部の方から部落差別の現状についての説明）
・奈良、大阪方面への同和教育現地研修　等

（2）学びの連続性を意識した「３期３類ひがし同和教育プラン」に基づく同和学習の実践
・Ⅰ期（1、2年）Ⅱ期（3、4、5年）Ⅲ期（6年）の３期ごとの人権課題の設定
・３つの同和学習の類型（生活体験学習、社会参加学習、部落問題学習）の設定

○教育プランを進めるにあたって
・同和学習を中核としたカリキュラムの作成
・月に１度の同和学習週間の設定
・子ども自身が現地で学ぶ体験学習　等

**話題提供②**

**五泉市立五泉中学校　五十嵐　喜代春　校長**

～地域への感謝と貢献

「五泉中学校　きなせやまつり」の取組～

平成12年度より休止していた地域のまつりを地域・保護者の方々と協働して行う伝統行事として復活させた。その活動の見直し、改善を図る。

（1）課題
・学校の負担が大きくなってきている現状から持続可能な活動への転換

（2）課題解決のために
・総合的な学習と関連付けた、子どもたちの発表の場という位置付け（３年間を見通した総合的な学習のカリキュラムづくり）
・活動のねらいについての地域・保護者との話合いと共通理解（自己有用感、地域への貢献）
・飲食等、子どもたちを楽しませる部分からの職員の撤退、保護者・地域との役割分担

**3　指導講評・情報提供**

**新潟県教育庁義務教育課長　大橋　伸夫　様**

・同和教育先進校の取組事例を紹介し、それを参考に同和教育を推進していく。
・働き方改革を推進する上で学校と保護者・地域との合意形成が課題となる。

（国、県への要望についての回答）

・新学習指導要領の趣旨の実現を図るための人的配置の拡充→国に対して引き続き要望
・その他（教職員の待遇改善、通級指導教室の増設、給与体系の一本化、学力向上施策　等）

**新潟市教育委員会学校人事課長　吉田　隆　様**

・地域とともに歩む学校とは、地域と目的を共有して取り組む学校であり、それが教育の質の向上や働き方改革につながる。

新潟県小中学校教頭会
［事務局］
県教頭会ホームページ
全国公立教頭会ホームページ
〒950-0911　新潟市中央区笹口２丁目７－17 和田ビル２F
E-mail　n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp　TEL（025）244－8225
http://www.niigata-kyotokai.jp/　FAX（025）244－5060
http://www.kyotokai.jp/